

平成27年度 第2回 千葉県博物館協議会会議 議事録要旨

日 時：平成27年11月26日（木） 13：30～16：00
会 場：千葉県立房総のむら 風土記の丘資料館集会室
出席者：委 員 岡本委員（議長） 塚原委員 鶴澤委員 水嶋委員 細井委員
博 物 館 美術館：田村館長 中央博物館：川戸館長
現代産業科学館：小野館長 関宿城博物館：金丸館長
房総のむら：安藤館長
文化財課 植野学芸振興室長

【議事概要】

- 1 開 会
- 2 館長あいさつ 房総のむら館長によるあいさつ
- 3 議 事

（1）学校教育への博物館のあり方について

議長：今回は、房総のむらの学校教育への博物館の学習支援あり方、取り組みについて協議します。

房総のむら：（概要説明）

議長：房総のむらの特徴は「見てもらう」ことが主体の通常の博物館と異なり、「体験する」という要素が強いという点と、他は県自体が運営するのに対して、指定管理者制度で県の枠とは異なる形で運営されているという点にある。それでは、各委員より意見をお願いしたい。

委員A：体験のしおりは館の説明資料としてよくできており、教職員の研修などでも十分に使用できると思う。これはどんな時に配布されているのか。

房総のむら：毎年年度末に刷り上げて、3月末には県内小中学校、東京の一部（千葉県寄りの学校）に配布している。県内外合わせて1,000校程度配布し、一般には実質100円にて販売している。

委員B：中学年の子どもたちを連れて来館した際、農家の敷地内にある建物をわかりやすく説明し、子どもたちにとっては良い体験・学習になったと思う。ただ、どろめんこは江戸のものとは異なり、色付けを楽しむだけのものになっているように感じる。また、教職員を対象とした研修において、資料（平成24～26年）を比較すると、小学校で8に減少した、というのはカリキュラムが半日から1日になったことと関連があるのか。

房総のむら：数の減少は授業時間の確保ということで、先生方の都合が合わず、年度ごとに調整がつかない点がひとつと、学校現場で有効に使ってもらいたいため、ボリュームアップを図り、ただ来て子どもたちと同じ演目体験をするだけでなく、双方向で意見の交換ができるようにしたが、現場の先生には負担になった可能性もある。

委員 C：体験型博物館としての取り組みが良いと思う。県の指定管理という点においてのメリット・デメリットなどはあるか。修繕費などで反映されている点などがあるかと思うがどうか。

房総のむら：改修に関しては、トイレ改修などの大きな改修は県、床のはがれなどの小さなものは指定管理の財団が行っている。ソフト面において、歳入と歳出というところで弾力的な対応が可能である。演目に対する料金の設定に関して柔軟性があるのはメリットといえるが、人件費については県のシステムとは異なるため、本来博物館に必要とされる研究員の確保が難しいというデメリットがある。

房総のむら：小回りが利き、がんじがらめではない点はあるが、予算における自由度は少ない。

委員 A：最近外国の来館者が多いようだが、外国人向けのコースはあるか。

房総のむら：基本的に自由に回ってもらい、ボランティアガイドをつけてまわってもらっている。

委員 D：何度も来ているが、平日はむらの中でやっている演目が少なく寂しい。体験型博物館なので、工夫があるとよい。

議長：風土記の丘が母体だった頃は、ここが考古学の研究の拠点となっていた。指定管理者制度をどのように考えるか、というのはこれからの課題である。改修に関しても本来ならばトイレではなく、資料館のリニューアルなども考えるべきであるが、それについては県の文化財課はどのように考えているか。

文化財課：文化財課では分館含めて8つ、長期的な改修は考えていかなければならないと思っている。しかし、県には他に8,000の建物があるので、いつとは具体的にはわからない。考古資料は、ここと大多喜町の旧大多喜女子高校舎に分散して収蔵している。現在常設展の更新をどのように進めるか協議中である。

委員 B：小学校の成果は上がっているが、中高、大学生が活用できるようにならないか。

議長：東京だけで6校来館するのだから、県内でもう少し何とかできるのか、できないのか。取り組みを教えてください。

房総のむら：中学向けの取り組みはほとんどやっていない。団体体験の実績は、ほぼ小学校に限られていることもあるが、中学校は声をかけても反応はほとんどない。

委員 B：高校のサイエンススクールなどは単位授与などがあるが、そういった特化した方向性の取り組みはないのか。

房総のむら：博物館実習に参加申し込みをしている大学と、何かしらの連携ができることはないかと考えているが、きっかけが難しい。

議長：では、参考までに各館の中高との連携を教えてください。

美術館：情報は提供しているが、学校は目先のものに追われて難しい。学力アップばかりで学校に余裕がない。教員の多忙化もあり、余程熱意のある者でないと受講しない。美術館もスクラップをしていかなければいけない。学校連携もそうとうやりつくしており、

連携はかなり先細りしている感がある。

中央博物館：中学とは、職場体験で連携をしている。高校はSSHなど理数科の生徒への論文指導などが効果的であると考ええる。大学は博物館実習で高い評価を得ている。子どもたちにはひとつひとつ丁寧に展示資料の価値を説明してあげることが大切である。1回は校外に出てもらえるように博物館を利用するメリットをアピールしていくことが重要と考える。

現代産業科学館：なるべく外に職員を派遣するようにしている。旭市の小学校では総勢500名を3回入れ替えで対応し好評価を得た。市川工業からは単位認定支援制度を活用し、年に13人ほど来館しており、学生が実習や手伝いをする事で1単位を取得できるカリキュラムを行っている。中高生は学校行事などが忙しく、来館は難しいようだ。

関宿城博物館：当館も小学校が多い。埼玉県と茨城県と隣接しているため、他県の学校と野田市や流山市の学校が来館する。中学校は職場体験を受け入れているが、見学で来館する生徒は多くない。高校は関宿高校と過去に授業の連携を行ったことがある。今年度、関宿高校から提携を行いたいという話もあり、やっていきたいと考えている。県を越えたような形も検討課題かと思う。

議長：ひとことに学校教育への学習支援といっても、学校や教師の受け入れのキャパの問題などいろいろとあるかと思うが、本日は房総のむらを中心に、どのような取り組みをしているかという話をしてもらった。何か意見がなければ終了とし、事務局に返し閉会としたい。

事務局：＜評価についての説明・閉会あいさつ・次回案内＞